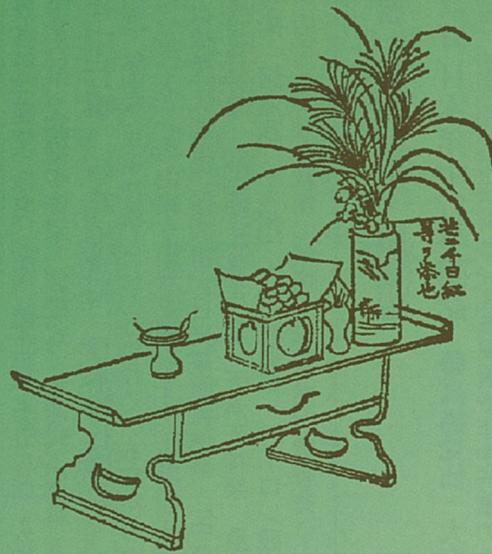


# 日本年中行事選集

## 第二回

○八月十五夜 八月十五日を仲秋といふ。陰曆による秋は七月、八月、九月の三ヶ月九日間の総稱であるが、八月十五日は此の最中に當るから八月を仲秋と謂ふのに加へて殊に十五日を仲秋といふ。世に仲秋明月といふのは此の夜の月を指し、之れを賞するの心ばえから此の夜を月夕(つきのゆふべ)とも三五夕(三五の夕)ともまた單に中秋とも、芋の月とも、十五夜とも三五の月とも謂ひ、古來月見の本格とされてゐる。



### 小川直之 編・解説

- 第六卷 明治後期編  
定価 19,000 円 (税別) ISBN978-4-86670-028-1
- 第七卷 大正・昭和初期編  
定価 23,000 円 (税別) ISBN978-4-86670-029-8
- 第八卷 昭和戦前・戦中編  
定価 18,000 円 (税別) ISBN978-4-86670-030-4
- 第九卷 昭和戦中・戦後編  
定価 25,000 円 (税別) ISBN978-4-86670-031-1

全四巻 揃定価 85,000 円 (税別)  
ISBN978-4-86670-032-8  
A5判/函入/クロス装  
2018年6月末刊行

クレス出版

年中行事の解説書を年代順に、近代の年中行事の変化・変容・再解釈がわかるよう巻構成する。

年中行事研究は、**民俗学**、**歴史学**、**宗教学**、**神道学**、**仏教学**、地理学など広く人文学における学際領域であり、本書によって新たな研究視点の確立と展開が期待できるであろう。



日本年中行事選集 第二回 全四巻

揃定価85,000円(税別) ISBN978-4-86670-032-8 平成三十年六月刊行

第六巻 明治後期編

諸国年中行事(文芸倶楽部増刊第九巻第二号)

●石橋助三郎編 博文館 / 明治三十六年

【内容】文芸倶楽部が地域ごと、職域ごとに編集した年中行事の解説書

【目次抜粋】旧江戸年中行事の一斑、三十五年前、江戸將軍と狩猟、天長節、東都町方年中行事、相撲年中行事、劇場年中行事、芝居者の一年、魚河岸の一年、京都古今年中行事句合、大阪年中行事、浪華ぶり、大阪の一月、名古屋の新年、神戸年中行事、再度詣、年中行事雑考、大神楽(雑録)

明治年中行事全 ●細川潤次郎 西川忠亮 / 明治三十七年

【内容】宮中で行われる年中行事の来歴と沿革を解説

【目次】四方拜、一日祭、朝賀、二日祭、三日祭、元始祭、政始、新年宴会、御講書始、陸軍始、英照皇太后祭、歌御会始、孝明天皇祭、祈年祭班幣、紀元節、賢所神殿祈年祭、仁孝天皇祭、皇靈祭(春季・秋季)、神武天皇祭、観桜会、皇后陛下御誕辰、神宮月次祭(六月・十二月)、節折(六月・十二月)、大祓(六月・十二月)、神嘗祭、天長節、観菊会、鎮魂祭、新嘗祭、後桃園天皇祭、光格天皇祭、御神楽、除夜祭

定価 19,000 円 (税別) ISBN978-4-86670-028-1

第七巻 大正・昭和初期編

年中行事 ●飯田傳一 金港堂書籍 / 大正三年

【内容】朝廷で行われている公事をはじめ、民間で行われている主要な行事を月ごとに纏める

【目次抜粋】一月行事 御歌会始附御歌所、二月行事 初午附稻荷神と狐 紀元節、三月行事 雛祭(桃の節句) 彼岸、四月行事 神武天皇祭 靖国神社祭附招魂祭、五月行事 八十八夜 端午、六月行事 四万六千日 大祓、七月行事 施餓鬼 土用附虫干、八月行事 八朔 放生会、九月行事 重陽 中秋観月、十月行事 べつたら市 恵比須講附七福神、十一月行事 元服附七五三祝 新嘗祭附大嘗会、十二月行事 臘八会 賢所の御神楽

年中事物考全 ●矢部善三 素人社書屋 / 昭和四年

【内容】正月から十二月までの月令事物に解説を施した案内書

【目次抜粋】正月事物篇 初夢附、一富士二鷹三茄子、二月事物篇 二月の冬枯れ、三月事物篇 節物(草餅桃、白酒、蛤、四月事物篇 学年始めと年度始、五月事物篇 五月を忌む伝へ、六月事物篇 夕立と其の神説、七月事物篇 海水浴と其の由来 土用入、八月事物篇 簾と其の伝へ、九月事物篇 二百十日の由来と正体、十月事物篇 菊と菊の造り物、十一月事物篇 暦と其の由来及び頒布 七五三の祝い、十二月事物篇 初雪と其の古儀

定価 23,000 円 (税別) ISBN978-4-86670-029-8

第八巻 昭和戦前・戦中編

民間の儀式 ●山本信哉 雄山閣 / 昭和十年

【内容】京都を中心に民間年中行事を取り上げる歴史学からの研究書

【目次】緒論 正月(家外行事・家内行事)、二月 初午、三月 彼岸、四月 灌仏、六月 祇園会、七月 七夕、八月 月見、九月 重陽宴、十月 玄猪、十二月 煤払

家庭祝祭行事指針 ●佐藤文憲

【内容】家庭における祝祭行事の中から、推奨すべき二十項目を選び解説する

【目次抜粋】誕生、命名、初詣、誕生祝、七五三詣、入学・卒業奉告祭、成年・入宮・除隊奉告祭、結婚奉告祭、銀婚式・金婚式、還暦・古稀・喜寿・米寿祝

諸国年中行事 ●鉄道省編 日本旅行協会 / 昭和十四年

【内容】諸国で年中行事として行われている祭礼の中から二十五を選び、七地方に分けて、その由来や現状を解説する。巻末に諸国年中行事一覽

【目次抜粋】(関東) 西の市 日光東照宮例祭、(中部) 浜松の風揚 吉田火祭 弥彦燈籠神事、(関西) 太秦牛祭 天満天神祭 桑名石採神事、(中国) 西大寺会陽 阿波踊、(九州) 大宰府追儺 ベーロン競漕、(東北) 相馬野馬追 八戸のえんぶり 秋田の竿燈、(北海道) 雪戦会

定価 18,000 円 (税別) ISBN978-4-86670-030-4

第九巻 昭和戦中・戦後編

増補改訂 日本年中行事講話 ●高橋梵仙 大東出版社 / 昭和十五年

【内容】国民精神の根幹といえる風習や年中行事の中から、宗教・教育・社会事業に関するものを月ごとに、起源と意義を解説する

【目次抜粋】一月の行事 宮中三殿の成立並意義、二月の行事 事始事納と針供養、三月の行事 地久節、母の日、四月行事 聖徳太子祭、五月の行事 動物愛護週間、六月の行事 時の記念日、七月の行事 諸国盂蘭盆風俗、八月の行事 日韓併合記念日、九月の行事 大震災記念日、十月の行事 明治神宮競技大会、十一月の行事 図書館週間、十二月の行事 耶蘇降誕祭

日本歳事全史 ●江馬務 白井書房 / 昭和二十四年

【内容】宮中、幕府、神社、寺、民間の年中行事を、その起源に溯って解説。暦が変わる明治維新前と後の二部構成にした意欲作

【目次抜粋】戸隠神社若戸開神事 寒川神社追儺祭 長野松本市の鈴市、秋田の正月奇風、二月堂御修法(お水取)、日吉山王祭、尾張津島祭、博多祇園祭、阿蘇祭、諸国七夕行事総覧(近畿・関東・北陸・東北・中国・四国・九州)、長崎諏訪祭、太秦牛祭、琴平祭(今の紅葉祭)、顔見世、春日若宮祭、宮中武家豆打、民間豆まき、アイヌの熊、尾鷲町ヤーヤー、宇和島和霊神社牛鬼

定価 25,000 円 (税別) ISBN978-4-86670-031-1

日本年中行事選集 第一回 全五巻

揃定価88,000円(税別) ISBN978-4-86670-011-3 平成三十年二月刊行

第一巻 歴史資料編 定価16,500円(税別) ISBN978-4-86670-006-9

永正六年 殿年中行事 ●田北学 増補訂正編年大友史料 / 昭和四十五年

【内容】室町幕府申次職・大館伊予守尚氏の父が記した江戸時代以前の武家の年中行事史料 文禄四年 当家中作法日記 ●田北学 増補訂正編年大友史料 / 昭和四十五年

【内容】九州北部の中世守護大名・大友家の年中行事史料

寛文八年 玄医「民間歳時記」全 ●一八丁 版本 / 延宝九年

【内容】医師・名古屋玄医が民間年中行事を和漢の文献で解説。飲食物に着目して効能を説く 民間年中故事要言 一〜七 ●一四八丁 版本 / 元禄十年

【内容】河内の国学者・藤遊燕が民間年中行事について、漢籍と和書をもとに来歴や意味を解説 当時年中行事 ●六四丁(二二八頁)

【内容】旧侯爵家・久我家旧蔵の宮中年中行事の写本 ※写本・書込みあり

第二巻 地域民俗編(1) 定価19,000円(税別) ISBN978-4-86670-007-6

農村の年中行事 ●武田久吉 龍星閣 / 昭和十八年

【内容】植物学者・登山家でもある武田久吉が一年の農村行事を纏める。全体の三分の一が写真頁

第三巻 地域民俗編(2) 定価16,000円(税別) ISBN978-4-86670-008-3

佐渡年中行事 ●中山徳太郎・青木重孝 民間伝承の会 / 昭和十三年

【内容】序・柳田國男。佐渡の年中行事を部落単位で調査

甲州年中行事 ●大森義憲 山梨民俗の会 / 昭和二十七年

【内容】序・折口信夫。山梨県内の年中行事を紹介。著者の居住地、富士吉田、南都留郡が多い 大阪府下年中行事集 ●南要 和泉郷土研究会 / 昭和十四年

【内容】年中行事語彙集。編者の調査と和泉の民俗学者の調査を月別に纏める

第四巻 寺社行事・祭礼編(1) 定価18,000円(税別) ISBN978-4-86670-009-0

日本祭祀暦 ●小寺融吉・北野博美 日本民俗協会 / 昭和十一年

【内容】東京・千葉・神奈川・埼玉の神社・寺院の祭礼・法会を、特に芸能は太字で期日順に紹介 まつりと行事 ●橋浦泰雄 毎日新聞社 / 昭和二十四年

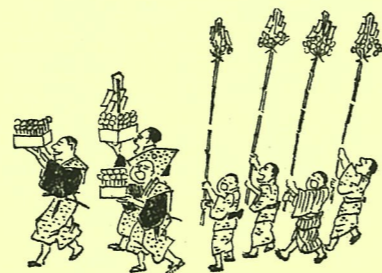
【内容】全国各地の伝承事例をあげながら、当時の民俗学研究成果を論述する

第五巻 寺社行事・祭礼編(2) 定価18,500円(税別) ISBN978-4-86670-010-6

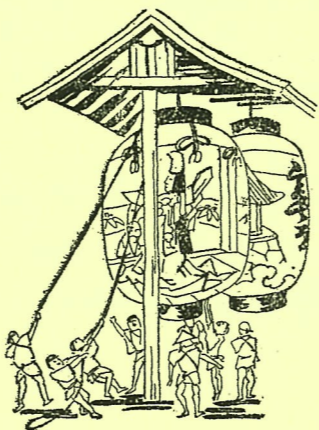
南都七大寺の行事 ●佐伯啓造 鶴故郷舎 / 昭和十七年

【内容】戦時体制下においても諸行事が持続されていることが伺える貴重史料 九州路の祭儀と民俗 ●宮武省三 三三三社 / 昭和十八年

【内容】九州地方の祭礼・神事・芸能について、著者が実地に見聞調査したものを纏める



紀伊笑ひ祭



三河一色の大提燈

関連書はこちら

小川直之 監修・解説

日本民俗 全一卷

【内容】折口信夫が主宰して3年間だけ発行した幻の雑誌を全号復刻 定価17,000円(税別) ISBN978-4-87733-996-8

池田末則 編・解説

近代地名研究資料集 全六巻

【内容】明治末から昭和戦後までに刊行された地名に関する稀観文献 全六巻 揃定価107,000円(税別)

第一回 全四巻 日本歴史及地理要覧、帝国地名大辞典上・下、大日本市町村案内 揃定価88,500円(税別) ISBN978-4-87733-277-4 第二回 全二巻 アイヌ語より見たる日本地名研究、アイヌ語より見たる日本地名新研究、町村名の研究 揃定価18,500円(税別) ISBN978-4-87733-280-4

江原絢子 編・解説

近代料理書集成 一 日本の食文化史 全二回

【内容】明治以降に刊行された料理書をジャンル別に年代を追って集成 第一回 全六巻 西洋料理、家庭料理、菓子・パン

揃定価76,000円(税別) ISBN978-4-87733-643-1 第二回 全七巻 中国料理、弁当・漬物、戦時下の料理など 揃定価80,000円(税別) ISBN978-4-87733-723-0

食材別 料理書集成 全五巻

【内容】明治初期から戦前までの食材(米・麦、いも・豆、野菜・果物、魚介類、肉・卵・乳)に視点をおいた料理書を厳選。 揃定価62,000円(税別) ISBN978-4-87733-949-4

詳しいカタログの請求は当社まで

info@kress-jp.com (TEL) 03-3808-1821 (FAX) 03-3808-1822



## 『日本年中行事選集』第二回の構成と刊行——年中行事はどう解説されてきたか

國學院大學教授 小川直之

『日本年中行事選集』第二回は、明治時代後期から昭和戦後期までに出版された年中行事の解説書を中心にして全四巻で構成した。年中行事の解説書というのは、行事内容の来歴や意味などを説明した書冊のことである。行事がどのように行われているか、いわば客観的に記すことに加え、その来歴や意味の解説はすでに江戸時代から行われている。『日本年中行事選集』第一回の第一巻歴史資料編に収録した寛文8年(1668)筆の『民間歳時記』や元禄10年(1697)板行の『民間年中故事要言』はこうした内容をもつ。『民間歳時記』の「元日ノ慶」には「書言故事ニ曰正月朔日之ヲ元日ト謂」云々と、行事説明は和漢の文献に拠っているのであり、これは『民間年中故事要言』も同様である。

日本各地の年中行事について、その地の伝承に基づいた研究が始まるのは柳田國男によって、大正時代に民間伝承研究が提唱されてからであった。民俗学は、過去の文献記録ではなく、その時点の在地の民間伝承を資料とすることが画期的だったのである。しかし、先にあげたような和漢の文献記録からの年中行事の考証、解説は明治時代以降も続き、たとえば昭和4年(1929)刊の矢部善三『年中事物考』は、最初の「年歳の名義」は本居宣長の『古事記伝』によればとして説明している。このような手法での行事説明は、見解を変えながらも既刊書の焼き直しの観は否めないが、『日本年中行事選集』第二回に取りあげた書冊は、少なくとも三つの点において有益な研究資料等となり得る。

それは第一には、明治時代以降の年中行事解説書では、皇室の行事と祭祀の国家儀礼化に従って、宮中行事や新たな国民の祝祭日、記念日の記載が行われ、これらの推移がわかることである。細川潤次郎『明治年中行事』は、まさに宮中年中行事を国民に周知することを目的にしている。

そして、第二には日本の年中行事はこうであると、国民文化としての年中行事の提示が行われていて、近代における国民文化形成の動向がうかがえることである。明治36年(1903)の『文芸倶楽部』増刊号である『諸国年中行事』は、東都町方、相撲、劇場、京都、大阪など場所や職種ごとの年中行事を概説しているが、大正時代以降の解説書では行事内容を日本で一般化している。

もう一つ第三には、具体例をあげると、現在では夏の土用になると情報メディアが盛んに取りあげ、国民的な慣わしであるかのように思える丑の日の食べものは、『年中事物考』では諸病除けにウナギの蒲焼きや土用鶏卵、土用シジミをあげていて、この時点ではウナギに特化されていないのがわかる。また、11月の七五三の祝いには、現在では行われなくなった三歳から魚を食べる「魚味の祝い」があり、正月のおせち料理では個別の縁起担ぎの説明などもある。つまり、近代における行事内容の変化変容や再解釈がうかがえるのであり、こうした年中行事研究の資料として利用できる。

巻構成を明治後期、大正・昭和初期、昭和戦前・戦中期、昭和戦中・戦後期と、年代で行ったのは、上にあげたような近代の年中行事の変化変容がわかるようにするためである。年中行事研究は、広く人文学における学際領域ともいえ、今回の選集第二回の刊行によって、新たな研究視点の確立と展開が期待できる。